

アンドレ・ジッド＝ポール・アルシャンボー往復書 簡：『アンドレ・ジッドの人間性』をめぐって

吉井, 亮雄
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/4752579>

出版情報：Stella. 40, pp.235-244, 2021-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン：

権利関係：

アンドレ・ジッド＝ポール・アルシャンボー往復書簡

——『アンドレ・ジッドの人間性』をめぐって——

吉 井 亮 雄

ジッドと批評家ポール・アルシャンボー（1883-1950）とのあいだには若干数の書簡の遣り取りがあったが、実際に現存が確認されているのは3通のみ（いずれも未刊）。本稿ではこのうち、1946年に後者の著書『アンドレ・ジッドの人間性』をめぐって交わされた2通を訳出・紹介したい。

アルシャンボーは、デモクラシー思想に影響を受けたオルレアン^①のクリスチャン家系^②の出で、早くも1906年には進歩主義的キリスト教運動の雑誌に論文を発表している。1911年には哲学教師としてパリ郊外ヌイイのサント＝クロワ高等中学に着任。教え子のなかには将来作家として名をなすアンリ・ド・モンテルランがいた。その後、第1次大戦中に動員され負傷するも、何度か軍功を表彰され、最後は大尉に昇進、レジオン・ドヌールを受勲した。退役後は財務省に席をおきつつ自由主義的カトリシズムの著作を数多く発表し（主要な版元はカトリック系のブルー・エ・ゲ）、一般には1924年創設の「国民民主党」公認の哲学者・批評家と見なされた^③。

以上のような思想的・宗教的経歴を反映して、同じカトリックでもアルシャンボーの批評姿勢は、ジッドにたいし容赦ない非難を浴びせつづけたアンリ・マシスよりも、むしろ作家の抱える苦悩に一定の理解を示そうとしたモーリアックのそれに近く、共感や賛嘆の念にも欠けてはいない。またその論述は、作家の日記やシャルル・デュ・ボスの『アンドレ・ジッドとの対話』（1929年刊）に多く依拠するものの、他の関連資料にも比較的よく目を通してはいる。

ジッド＝アルシャンボーの関係が始まったのは1939年秋とかなり遅く、また以後の遣り取りも決して頻繁であったとは思えない。じっさい、ジッドの『日記』にアルシャンボーの名が引かれることは一度としてなく、その膨大な書簡群においても後述のポール・ヴァレリー宛、ジャスティン・オブライエン宛を

のぞけば、彼にかんする記述はいっさい見当たらない。必然的と言うべきか、作家が主導した『新フランス評論』との関わりも実質的に皆無。同誌としては、1926年8月号で当時の常連寄稿者フランソワ・ド・ルーがアルシャンボーの論考「ジャック・リヴィエール」(カトリック系の『エチュード』誌3-4月号掲載)を好意的に評したのが唯一例外的な対応であった²⁾。

かくのごとく作家と批評家との関係は公私のいずれにおいても親密なものだったとは言えないが、本稿の主題たる未刊書簡提示の前置きをかねて、当初の交流について簡略に触れておこう——。1939年の10月半ば、アルシャンボーは日曜版週刊紙『ル・プチ・デモクラット』に、出来して間もないジッドのブレイアッド版『日記(1889-1939年)』の書評を発表、同著を作家の内奥を探りうる証言としておおむね肯定的にとらえた³⁾。それから半月後の11月1日、彼はジッドに宛てて小型用箋1葉の短信を送っている(パリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫現蔵)。残念ながら筆者自身は未見だが、時期的な照応から判断するかぎり、その内容が書評掲載の通知(場合によっては切り抜きも同封)であったことはまず疑えまい⁴⁾。あるいは文面には発表予定のジッド論のことも記されていたかも知れない。というのは、『エチュード』誌の翌1940年1月20日号には再度『日記』をとりあげた彼の論考「《いざ、生きん Tenter de vivre》」が掲載されるからである⁵⁾。

同論考は上記書評の見解を敷衍・拡充したものだが、ここでは具体的な内容には立ち入らず、それを読んだジッドの反応を記すにとどめよう。2月5日付のヴァレリー宛書簡には次のような追伸が添えられている——

『エチュード』誌に最近、ポール・アルシャンボーと署名が入った、僕の『日記』にかんする論文が出た。「いざ、生きん」という題の論文だ。君の『海辺の墓地』のなかの)語句を借用して僕の本の結びとすれば面白いと思った⁶⁾。括弧に入れておくだけで十分だと考えたのさ。出典を明記したりするのは、かえって読者にたいする侮辱だと思ってね。ところがこの論文の著者は、たしかに括弧はそのまま付けてはいるが、当の言葉は僕が書いた代物と見なしているような、あるいはあたかも僕自身がそう考えているような思わせぶりなんだ。これは僕らふたりにとってひどく不愉快なことだから、かなりきつい調子でその旨を書き送ったところだ。⁷⁾

最終文の記述から、遅くともこの時点では彼とアルシャンボーとの遣り取りが相互的なものとなっていたことが分かる(ただし後者宛の「かなりきつい調子」

の書簡は残っていない。またその受け手が返答した蓋然性は高いが、これについても委細は不明)。

翌1941年6月、アルシャンボーはカトリック系の不定期刊雑誌『コンストリュイール』(『エチュード』の後継誌)への寄稿で、ジッドが1916年から数年にわたり経験した深刻な宗教的危機の証言録『汝もまた……?』(1922年匿名私家版、1926年単行版ののち、プレイアッド版『日記』に収載)に焦点を当てる⁸⁾。カトリック的観点からの批判を少なからず含むこの論文については、ジッド自身が後掲の《書簡1》で言及しているのもそれに譲るとして、とりあえず確かな事実、すなわち彼がアルシャンボーから論文(抜刷ないし掲載雑誌)を贈られたこと、これにたいし反論をまじえた礼状を返したことを記しておこう(《書簡1》冒頭部参照。ただし今回もまた両者の書簡は保存されていない)。

その後数年の遣り取りを裏づける資料・証言は見当たらないが、アルシャンボーは終戦後の1946年3月、前年復刊された『エチュード』誌に新たな論考「アンドレ・ジッド作品における自由のドラマ」を発表し⁹⁾、またほぼ同時期(3月ないし4月)には、パリのフランス友好文化センターにおいて「神なき^{ライック}ヒューマニズム」と題する講演をおこなっている。後者は「ジッド、ヴァレリー、アラン、デュアメル」と副題を添えてはいるが、ジッドの倫理的姿勢の分析と批判とがディスクールの大半を占め、内容的には先行論文の変奏と呼ぶうるものであった(当該テキストは翌年7月、アルシャンボーはじめ計6人の講演記録集『現代人の大いなる呼びかけ』に収載)¹⁰⁾。

*

以上数篇の論考をもとに大幅な加筆をほどこしたものが、同年の夏ブルー・エ・ゲ社から出来た『アンドレ・ジッドの人間性』である¹¹⁾。8月末には早くも最初の書評があらわれるが¹²⁾、南仏アルプ＝マリティーム県のカブリヤスイスのヌーシャテルに滞在していたためか、ジッドが同書をみずから購入・入手するのは9月に入ってからのものであった。

表題に謳ったように本稿が以下に示すのは、このときに交わされた2通の未刊書簡。残存するのはいずれも原本ではなく、ジッドが当時の個人秘書イヴォンヌ・ダヴェに命じてタイプ打ちさせた写しであるが、重要性を認めた送受信は写しをとっていた作家の習慣を思えば、これらの資料的価値はおのずと明ら

かであろう。それでは、まずは著書本人からの献本を機に書かれたジッドの礼状から（いくつかの細部記述については註の補説を参照されたい）——

《書簡1》ジッドのアルシャンボー宛¹³⁾

アンドレ・ジッド氏

ヴァノー通り1番地乙

パリ7区

パリ, 1946年9月25日〔水曜〕

〔ジッドの自筆で〕P・アルシャンボー宛

拝啓

ご高著がこの10日ほど私の精神と思考を占めていたこと、それは当然にして何ら驚くべきことではありません。ご本（昨朝落掌）はあなたから頂戴するまえに読了しておりました。あるいは再読していたというべきか。なぜならば、いくつかの章はご親切にもすでにお送りくださっていたからです。そして、それらについては私のほうからもお手紙を差し上げておりました。

その手紙のなかで、あなたの賢明さと温かい共感から得られた励ましについて熱をこめて長々と述べたのち、追伸にいたって拙著『汝もまた……?』にたいするいくつかの解釈にかなり激しく反論していたことが思いだされます。あなたによれば、私はキリストの言葉のなかに、私の人生の（キリスト教的な意味で）最も罪深き行為、みずから咎められるべきと見なしながらも、当時にあっては聖なる光から逃れるのに好適だと感じていた行為の正当化のみならず、是認をさえも求めているということでした。しかしそこには明らかな混同、少なくとも時系列上の混同がありました。そして、たとえ後にキリスト教的倫理からの脱却が可能になったとしても（あるいはそれを望んだとしても）、自惚れから逸脱の口実をキリスト教に求めることなどは断じてなかったろう、そう私は反論していたのです……。最初の玉稿は手元がないので、ご高著と比べてみることはできませんが、おそらく私の手紙を受けて、いくつか手をお入れになったのではないのでしょうか。というのも、今日この『汝もまた……?』を論じた]第13章を読み返してみても、私が違和感を覚えるようなところはまったくないからです。

あなたのお手紙は端から端まで完璧な善意と、言葉には尽くしがたい誠実さに充ちています。私を批判・否認、あるいは断罪するときでさえも、理解し共感したいというお気持ちは比類がなく、まさにこれ以上は望みえぬほど。深く感謝申し上げる次第です。

ご高著のタイトルが早くも私を喜ばせます。あらゆる相違をこえて、共通点を、我々が互いに通じ合えるものを強調しているからです。くわえてご高著は説得的……、そう申し上げます。拝読しながら、私自身が主題となっていることを忘れるほどでした。議論が始まると、読者は章から章へと淀みなく興味をかきたてる一種の親密なドラマをたどってゆくのです——少なくとも最終章に先立つ数章までは。〔そうお断りするのは〕そこでは無理な理屈が勝っており、あなたが線引きしようとなさっている

«bonheur», «joie», «plaisir» の区別は私にはいささか承服しかねるところだからです¹⁴⁾。言うまでもなく私は、信仰の喪失は精神化への妨げ (*désprituarisation*) だとする主張 (それはすでにシャルル・デュ・ボスの主張でありましたし、またモーリアックの主張でもあります) には反対です。ええ、当然あなたとしては、そうお考えにならざるをえないのでしょうか。だが精神性を信仰のなかにしか認めておられぬことは今や明々白々、それこそは脱出不能な循環論法なのです。すべては前もって証明済みであり、それだけに何も証明されてはいないのです。矛盾を証立てる例はいくらでも挙げられます。

私は、あなたが私に期待してしかるべき「胸を引き裂くような (*déchirant*)」(この語は秀逸) 決定的傑作を物していないことは認めます。己が掲げたであろう約束・期待には応えてはいなかった……。そうかも知れません。これは私自身が判断を下すことではありません。しかしあなたは、キリスト教的真理への同意・信従こそが、私にかかる崇高な作品の執筆を可能にし、いやがうえにもそこへと導いたであろう、そう信じ、人にもまたそう思わせようとしておいでのようです。すると私としては、我々が共に知っている多くの芸術家、(なかでも) [カトリックに回心したフランシス・] ジャムや [アンリ・] ゲオン¹⁵⁾、モーリス・ドニのことを考えざるをえません。「信仰」があらゆる探求・努力を免じてくれるという確信に身を委ねてしまうや、嘆かわしいことに、その信仰のせいと逆に一切の飛躍を止め、もはや価値あるものは何ひとつ物さなくなるのです。あなたは子供じみたジャムの理屈をご存じです。[それに従えば] キリスト教が異教よりも優れているのと同じように、私自身の農耕詩もキリスト教的であるため、ウェルギリウスの農耕詩に勝っていることになるのです。この幼稚な放言 (ジャムは確信していましたが!) を議論のために持ち出したとは思わないでいただきたい。しかしいずれにせよ、キリスト教的な視点はしばしば批評家の判断に偏りをもたらします。たとえばアンドレ・ルソーが、キリスト教の発露でないならば「相互の同意」以外の美質をなんら持たぬベギーの詩のいくつかに陶然とするように¹⁶⁾。同様に愛国心にかんしても、信仰上の盲目的排外主義は何でも偽造してしまうのです。もっともな理由を掲げれば、不公正であってももはやそうではなくなるかのようです。有り難いことに、あなたはこの悪しき傾向には染まっておられません。そこに陥らぬよう自制しておいでです。

伝統により与えられ容認された真実のなかで、それに従って栄え、自己の才能を開花させるのは容易いこと。[いっぽう] 求めはするが、あらかじめ承認されているものは何も認めぬ者は非常な不利を背負うこととなります。大きなリスクを引き受けるのです。しかしながら私としては、多くの試行錯誤・躊躇・反省をへて、最近の著作が後になっても揺るがぬ確実さのなかで堅固なものとなることを望みます。私の著作が、その美質 (あなたは多くの人間の共感をもってそれを認めてくださいますが) によって、我らに続きこの悲惨な地に来る者たちの注目に値するの否か、それを判断することも、ましてや主張したりすることも私の任ではありませんが。

ご高著の所々に見受けられるいくつかの断言、とりわけ第 150 頁のそれ——「隣人

への献身から神への献身までは「…」自然な流れである」——は、私を当惑させます。非常にあやふやで、ほとんど証明を欠く断言です。どうかそんなことは信じさせないでください。

以上を要すれば——。キリスト教的観点から非難可能なのは（あえて名指しはいたしません）私の倫理観と影響力だけであって⁽¹⁾、あなたが私の貢献・寄与するもの人間性については、それを誠心誠意擁護し、寛大にも見守ってくださったことに深く感謝する次第です。かくも長いあいだ私に関わられてきた今では、あなたは外のところに注意を向けたいと望んでおられるに相違ないでしょう（〔1922年ビュー＝コロンビエ座での〕ドストエフスキーにかんする連続講義を終えた私の場合がそうであったように）。ですが、『ラルシュ』誌の最近号に載ったペイルートでの講演を送らせます¹⁷⁾。それとあわせて、レジスタンスで息子が犠牲になったばかりのとある父親の度重なる懇願に応え、昨年6月に私が書いた短い序文についてもご一読いただければと。この〔ジャン・〕ラカーズ青年の詩集と、そこに付された序文は¹⁸⁾、たとえ市場に出たとしても、広くは読まれず、ほとんど気づかれることはないでしょう。しかも同序文は、何としても無節操な宣伝だけは避けたいと思いながら書いたものなのです。このほとんど秘密のテキストをお見せする、それを措いてはあなたへの信頼を十分に表すことはできますまい（返送していただくには及びません）。これに続いては他のテキストが、すでに私の著作にお認めになったものによつて光を当てることになりましょう。

私の著作を十分に読み込まただけに、私の求めるのが賞賛ではないこと、とりわけ高著のなかで私の心を打つのは賞賛ではなく、この完璧な善意、互いの相違にもかかわらず、私があなたに大いに親しみを感じるこの人間性であることはまさにご承知のとおり。それだけに、いつかあなたにお会いできる喜びが（〔気高き無上の〕^{プレジール}悦び^{ジョワ}ではないとしても）与えられるならば、互いに遠慮なく話が交わせるでしょう。私のほうからは愛情を込めてこの身を委ねます。

私の衷心からの信頼をお認めいただきたく。

〔アンドレ・ジッド〕

(I)「彼にはよく教えるということは不可能である。なぜなら彼は教会で教えているのではないから」(1660年2月14日の説教)——これは私がすでに引用し、あなたもそれを私の『日記』のなかにお認めになったボシユエの断固たる言葉です¹⁹⁾。

ときに強い反論を交えながらも、基本的には謝意と賛辞を綴ったこの長文が著者にたいする単なる外交辞令でなかったことは、半月後（10月7日）ジッドが当時『日記』の英語訳を準備中だったコロンビア大学教授ジャスティン・オブライエンに宛てた書簡の一節からも明らかであろう——「断固たるカトリック的観点と、それに発する少なからぬ指弾にもかかわらず、私が思うに〔この

本は] 全き善意にもとづく最良書、批判は不可避免的に含むにせよ、共感に溢れた最良書のひとつです」²⁰⁾。

ジッドの礼状を受けてアルシャンボーは次のような書簡を返し、感謝とともにそれなりの反論・弁明を添えている――

《書簡2》アルシャンボーのジッド宛²¹⁾

ペロネ通り 45 番地
ヌイイ (セヌ)

[19]46年10月2日〔水曜〕

拝復

息子のひとり連れてのオーストリア旅行、それに続いた娘の婚約のために、もっと早くにお返事することができないでいました。しかしあなたのお手紙に心打られたことはどうかお疑いなく。

拙著を「説得的」だと評してくださり、ひとりの物書きとして嬉しく存じます……。それこそが拙著を書きながら不遜にも私が抱いていた印象である、そう思し召せ。

また、ひとりの人間としては、拙著をつうじて、この私と、考えをめぐらせ読み返すたびにいっそう愛するようになった偉大な精神とのあいだに、かくも早く結ばれがなかったことはそれにもまして大きな喜びです。

あえて申し上げれば、私が結局のところ認める「精神化への妨げ」なる印象をあなたが宗教的な関心だけに帰結なさるとすれば、あなたは私の主張を誤解なさっております。――私が残念に思うのはただひとつ、[そこには限定のない] 総合的な関与が欠けていることなのです。

さらに私は、福音書が最もはっきり非難するようなことがらへの言い訳を、あなたが福音書それ自体のなかに――人為的かつ意識的に――求めたなどとは決して思っておりません。

この点では我々が完全に理解しあうことはないでしょう。

しかしそれ以外においては、共感の領域のなんとという広がり！そして、これらのテキスト（ラカーズと、ラジオ・レパノンでの講演）をお送りいただいたことを私はどれほど有り難く存じていることか。両テキストは、友人たちの幾人かが私に不安を抱かせていたある点にかんし、私自身の考えを完全に正当化してくれるように思えます。すなわち、まさにそれに値すると思われる人と作品であるならば全面的に信頼すべきだということなのです。

面談を提案させていただけるのでしょうか……。お知らせいただいた日、基本的には月曜日をのぞく午後の終わりであれば、ご一緒できます（電話はマイヨ 40-55）。

あなたにたいし深甚なる人間的共感を表させていただきます。

P・アルシャンボー

書簡末尾でアルシャンボーが希望しているように、ジッドとの面談が成った

か否かは、実証的資料が欠けるためいずれとも決しがたい。以後数年間の交流の有無についてもまた然り。そういった点ではいかにも隔靴搔痒の感をまぬかれないが、本稿としては『アンドレ・ジッドの人間性』をめぐる往復書簡の訳出により、作家の基本的姿勢と批評家の個人的見解、その双方の具体例を示したことをもってとりあえずの成果としたい²²⁾。

註

- 1) Voir André LAURENCEAU, *Un philosophe démocrate. Paul Archambault*, s.l.n.d [Saint-Jean-de-Braye, 1973].
- 2) Voir Paul ARCHAMBAULT, « Jacques Rivière », *Études*, t. 186, n° 6, 20 mars 1926, pp. 664-679, et t. 187, n° 7, 5 avril 1926, pp. 25-45 ; François DE ROUX, « Sur Jacques Rivière » [compte rendu], *La NRF*, août 1926, pp. 253-255. なおアルシャンボーのリヴィエール論は同年、次の著書に収載される—— Paul ARCHAMBAULT, *Jeunes maîtres. États d'âme d'aujourd'hui*, Paris : Libr. Bloud & Gay, coll. « Cahiers de la Nouvelle journée » n° 7, 1926, pp. 147-190.
- 3) Voir Paul ARCHAMBAULT, « Le Journal d'André Gide », *Le Petit Démocrate*, 15 octobre 1939, p. 3, col. 6-7. なお、存命作家の著作としては初めてプレイアッド叢書入りしたこの『日記 (1889-1939年)』の出版経緯や同時代の反響については、次の拙稿を参照されたい——吉井亮雄『ジッドとその時代』(九州大学出版会, 2019年), 第V部・第2章「ジッドと「プレイアッド叢書」——『日記』旧版をめぐる——」, 501-514頁。
- 4) この書評のテキストをアルシャンボーがジッドに直接送付した蓋然性は高いが、それとは別個にジャック・ドゥーセ文庫の専用ファイルには、作家の依頼に応じて専門業者が採取した切り抜きが保存されている。
- 5) Voir Paul ARCHAMBAULT, « “Tenter de vivre.” Le Journal d'André Gide », *Études*, 20 janvier 1940, pp. 159-170.
- 6) プレイアッド旧版『日記』は1939年1月26日の記述で終わるが、『海辺の墓地』の詩句をふまえたその最後の一節を原文で示すと—— « [...] Rien ne me rappelle à Paris avant mai. Me voici libre, comme je ne l'ai jamais été ; libre effroyablement, vais-je savoir encore “tenter de vivre” ?... » (*Journal 1889-1939*, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1939, p. 1332). ちなみに1997年刊の新版では同日分としてさらに1頁強の未刊記述が追加されている (voir *Journal II (1926-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Martine SAGAERT, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1997, pp. 640-641). この事実からは旧版の公刊にさいし、ジッドが印象的な結びの効果を狙って « tenter de vivre » 以降の

文章を意図的に収録から外していたことが読みとれる。

- 7) André GIDE - Paul VALÉRY, *Correspondance (1890-1942)*. Nouvelle édition établie, présentée et annotée par Peter FAWCETT, Paris : Gallimard, 2009, pp. 930-931 (この一節にかんしてはロベール・マレ編の書簡集旧版とのあいだに細かな文言の異同が少なからず認められる。Cf. la première éd. du même titre. Préface et notes par Robert MALLET, Paris : Gallimard, 1955, p. 519)。当のヴァレリーは3日後の返信で、問題の語句は「とるに足らないもので、ほとんど常套句にすぎない」と答えて、まったく意に介さぬ旨を伝えている (voir *ibid.*, p. 932)。
- 8) Voir Paul ARCHAMBAULT, «Le "Carnet vert" d'André Gide», *Construire* [Paris : J. Dumoulin], 3^e série, [juin] 1941, pp. 199-215.
- 9) Voir Paul ARCHAMBAULT, «Le drame de la liberté dans l'œuvre d'André Gide», *Études*, mars 1946, pp. 361-372.
- 10) Voir Paul ARCHAMBAULT, «L'Humanisme laïque : Gide, Valéry, Alain, Duhamel», in *Les grands appels de l'homme contemporain. Six conférences prononcées au Centre de culture de l'amitié française, janvier-avril 1946*, Paris : Éd. du Temps présent, 1947, pp. 171-198. ちなみにこの講演テキストは、ジッドの没後ほどなくして月刊文芸誌『人間』に日本語訳(訳者無記名)が掲載されている(1951年4月号, 125-137頁)。
- 11) Voir Paul ARCHAMBAULT, *Humanité d'André Gide. Essai de biographie et de critique psychologiques*, Paris : Boloud & Gay, 1946 (rééd. en 1950).
- 12) 筆者が確認しえた『アンドレ・ジッドの人間性』の書評は次のとおり—— Robert KANTERS, *La Gazette des Lettres*, 31 août 1946, p. 4, col. 2-4 et p. 5. col. 1-3; Pierre BARBIER, *Gavroche*, 24 octobre 1946, p. 4, col. 3-4; Guy S. LE CLECH, *La Nef*, n° 24, novembre 1946, pp. 198-199; Pierre DOURNES, *Témoignages chrétiens*, 6 décembre 1946, rubrique «Les Livres», page non identifiée, col. 1-3. また1950年再版の書評としては次のもの—— Renée LANG, *Books abroad* (University of Oklahoma Press), 1952, vol. 26, n° 3, p. 247.
- 13) ジャック・ドゥーゼ文庫, 整理番号γ51-2.
- 14) 実際にはアルシャンボーは「bonheur», «plaisir», «joie」に«volupté»を加えた4つの区別を主張している。それによれば, «bonheur»は「持続的な満足」, «plaisir»は「即時的で安易な解決」, «volupté»は「単に受け身の plaisir」ではなく, (悪徳や倒錯をも排除せぬ)探求・洗練・人為によって先鋭化・多様化した plaisir, «joie»は「plaisirよりも高度な plaisir, bonheurよりも色褪せぬ bonheur, voluptéよりも健全な volupté」とされる (voir *Humanité d'André Gide, op. cit.*, pp. 303-305)。
- 15) とりわけ彼らふたりの回心(ジャムは1905年, ゲオンは1915年)は, それまで親密であったジッドとの関係に決定的な変化をもたらしていた。
- 16) Voir André ROUSSEAU, *Le prophète Péguy. Introduction à la lecture de l'œuvre*

- de Péguy*, Neuchâtel : Éd. de la Baconnière, coll. « Cahiers du Rhône », 3 vol. 1942-1945.
- 17) ジッドが同年4月1日にラジオ＝レバノンの放送で、次いで12日にバイルート市内の映画館ロキシー座でおこなった講演「文学的回想と現今の諸問題」のこと (voir André GIDE, « Souvenirs littéraires et problèmes actuels », *L'Arche*, n°s 18-19 [août-septembre 1946], pp. 3-19)。このテキストの単行版は、その後もなく作家ガブリエル・ブーヌールの解題を付し、同地の「レ・レットル・フランセーズ」から出来る。
- 18) 1944年に18歳で戦死した青年ジャン・ラカーズの遺作詩集『出立の歌』のこと。ジッドはその父レイモンの求めに応じ、後者に宛てた書簡のかたちの「序文」を寄せている (voir Jean LACAZE, *Chants de départ*. Préface d'André GIDE, Finhan : Éd. Chantal, 1947)。アルシャンポーに送られたテキストはおそらくタイプ打ちの写し。なお、この詩集と序文は1958年、ジッドがレイモンに宛てていた書簡3通とともに後者による次の著書に再録される—— Raymond LACAZE, *Qu'on me pardonne d'en parler...* Précédé d'une lettre-préface d'André GIDE et de *Chants de départ* de Jean LACAZE, Rodez : Éd. Subervie, 1958.
- 19) Voir *Journal II (1926-1950)*, *op. cit.*, p. 387 [29 décembre 1932].
- 20) André GIDE - Justin O'BRIEN, *Correspondance (1937-1951)*. Édition établie, présentée et annotée par Jacqueline MORTON, Lyon : Centre d'Études Gidiennes, Université de Lyon II, coll. « Gide / Textes » n° 2, 1979, p. 20.
- 21) ジャック・ドゥーセ文庫, 整理番号 γ51-3.
- 22) これ以後アルシャンポーは、1948年初めにジッドのノーベル文学賞受賞 (前年11月) をうけての小論を、また自身の死去 (1950年11月) の数カ月前には、作家晩年の作品『テセウス』にも言い及んだ新稿を発表するが、そのジッド観は一貫して変わることがなかった。Voir Paul ARCHAMBAULT, « À propos d'un Prix Nobel », *Famille* (Bruxelles), janvier 1948, pp. 4-7 ; « Où en est André Gide », *Études*, juillet-août 1950, pp. 52-57.